

無機質の喧噪

PART 1：痛勤無情

眠い目をこすりながら、玄関のドアを開けた。今日もいい天気だ。11月ともなれば、朝方は少しばかり冷える。そのぶん、起き抜けの体にエンジンがかかるのに、ちよつと時間がかかるから、バス通りに出た頃、やつと周囲の状況を認識できるだけの意識が戻ってくる。

少し早起きして、まだ7時すぎだというのに、通りはそろそろ渋滞が始まっている。まだ駅まで歩いて10分はかかるうかという所にあるバス停に泊まったバスが、黒い固まりを大量に吐き出していた。ここから駅までは歩いたほうが早いのだ。いつのまにか、周囲には人があふれ、狭い歩道に、押し合ひへしあいして歩いている。のんびり歩けば、踵を蹴られるし、急ごうとしても、前をふさがれて身動きがとれない。だから、私はバスが来ると、反射的に小走りになり、バスより先にバス停を通り過ぎようとする。しかし、幸運にバスに先んじてても、うっかり足を緩めると後ろから足音が迫ってきて、あつと言つ間に人混みにまかれてしまうのだ。

誰も彼もが、驚くほど早足だ。こつやつて落ちついて書き物をしている時は、「なにも、朝つばらから、そこまでせかなくても」と思うのだが、いざ、その場にいると、やはり自分自身も、何者かにせき立てられるように、早足になつてしまつのである。そればかりではなく、誰かが自分を抜いていこうとすると、無意識にそれを阻むべくスピードを上げている自分に気がつくことがある。皆がそつだから、相互作用で、歩く速さがどんどん早くなつていくようにも思える。後ろから、早足で横をすり抜けたかと思つと、目の前でいきなりペースダウンして、私を押さえ込むかのように、目の前に割り込む奴もいる。これが車ならば、クラクションものだ。最も困るのは、私の前で、おもむろに懐からタバコを出して火をつける奴。なにも、この爽やかな朝に、しかもこの人混みでタバコを吸わなくてもいいものを。後で、うまくもない煙を吸わされる者の身にもなつてほしいものだ。こんな奴に限つて、それを嫌つて前にでると、そいつも早足で抜き返してくる。まったく、朝つばらから気分の悪い話である。

駅に続く道のほとんどが、こんな感じだから、駅の状態は簡単に想像がつくだろう。沿線の中でも、特に混雑の激しい駅だという話だが、最も混雑の激しい時間帯では、ホームの上も電車の中もかわらない状態である。2、3分間隔で滑り込んでくる電車は、すでに満員。どうやったら、これだけの人が乗り込めるのかと思うが、ほとんど、積み残しは出ないから不思議な話だ。

もちろん、その分、電車の中は想像を絶した状態になる。乗り込んだ直後は、まず修羅場である。とにかく、詰め込めるだけ詰め込んだ上に、まだ、何人もが必死の形相で乗り込んでこようとするので、もう、自分の足場すら確保できず、なすがままの状態になる。しかし、これが不思議と、電車が動き出してしばらくすると、次第に安定して、一種の平衡状態となる。窮屈なのは同じなのだが、必要以上に押されるでもなく、押すでもなく、安定した平和な状態が訪れるのだ。これで、窓外の景色を眺める余裕も生まれる。このような満員電車を毎日体験していて、それに慣れてしまっていたのだが、ある朝、ふと考えた。いったい自分の周囲にいる、これらの物は何だろうか……と。

たしか、人だよ。人のはずだ。自分の体を支えてくれる緩衝材ではないはずだ。でも、こいつらは、言葉をしゃべるでもなく、ただ単に、私の周囲に立って、私を押さえつけているだけではないか。やはり、自分にとっては単なる緩衝材だ。でも、ときどき、緩衝材の分を心得ない奴がいるぞ。なんだか、ぎゅぎゅと押しつけてくる。押し返すと生意気に咳払いなんかして。私の足を踏みつけて知らん顔の奴もいれば、不快な匂いをまき散らす奴もいる。うっかり緩衝材扱っていると、振り向いて睨みつける奴だっているぞ。押されるからしよがないじゃないか。そんなに睨むなよ。人だと思って見ると、確かに色々な奴がいる。迷惑面した親父どもに押しつぶされている、ランドセルの小学生。ヘッドホンで外界と隔絶されて何を思うのか、高校生風。会社じゃちゃんと仕事してんのか？、とぼけた新入社員風。部長だって社長だって、満員電車じゃタダのオヤジさ。お気に入りの服もメイクも、満員電車じゃ無力だよ、OL風。人だと思って見てしまうと、急に気が小さくなって、周囲に遠慮がちになる。そう、人間、この気持ちが大切なんだ。譲り合い、人を大切にすることがなくなっちゃ、世の中真っ暗だからね。ここまで

行くと、周囲から押されても、受けとめて腹も立たなくなる。出来た人格ってのは「こういふのを言うの」だろうね。

やがて、電車が終点に着くころには、私も立派な緩衝材になっているのである。

こうして会社にたどり着いた頃には、一日のエネルギーの半分くらいを消費した気分になってしまふのだ。しかし、全エネルギーの半分を朝の1時間で使ってしまうなんて、東京という街は、ずいぶんと損をしていると思う。とはいえ、この状況は簡単に変わりそうにない。おそらくは、東京で働く限りは、越えていくべきハードルなのだろう。

これをして東京のバイタリティーだという人もいるかもしれないが、少なくとも弱者にとっては過酷な街に違いない。一度ならずも、趣味のスキーで足を痛め、歩くのが辛かった時期があった。その時の朝の乗換駅の階段の恐怖は筆舌につくしがたい。私の事情など、だれも知らないのは無理もないとしても、何度か、押されて危うく転げ落ちるところだった。道楽での怪我なら自業自得であろうが、世の中には望まずして苦難を背負う人たちも多い。このような人たちが安心して暮らしたり、仕事ができ、はじめて「世界の東京」といえるのかもしれない。自分のことで精一杯ではなく、一人一人が他人を思いやる余裕を持てるようになり、他人のために自分のエネルギーを使えることが真のバイタリティーなのではないだろうか。いつしか、東京がそのような街になることを期待したい。

PART 2: 人混みの孤独

孤独を好むという人が少なからずいる。しかし、無人島にいるがごとき本当の孤独に耐えられる人は多くはあまりない。

小学校の頃、用事があった宿直の教師を夜に訪ねたことがある。トイレに行きたくなつて、長い廊下の向こうにあるトイレに行く途中、足がすくんでしまった。毎日歩いているはずの廊下が、これほど長く恐ろしいものだとはいふに及ばない。日中は生徒や教師であふれ、歓声がこだましている廊下が、しんと静まりかえつて闇に沈んでいる。コンクリートむきだし

柱、タイルばりの冷たい床、ぼんやり赤く光っている消火栓のランプ。なにもかもが、大きな口をあけて、自分を深い深い無機質な闇の中に飲み込もうとしているかに思えた。恐怖で身動きができず、大声で教師を呼んだ。何事かと教師が駆けつけてくれた時に、涙が出たのを覚えている。日頃、人にあふれている場所ほど余計に、その人がいなくなると無機的な感じがする。学校に怪談が多いのも、そういう理由からなのかもしれない。

田舎に生まれ育った若者は、概して都会にあこがれを持つものだ。因習や、狭い村社会の煩わしい人間関係などは、あるにはあっても昔ほどではあるまい。情報の遅れはなくなり、生活も、ある意味では都会より豊かになりつつある。にもかかわらず、若者が都会をめざすのは、そこに多くの様々な人間と、そのバイタリティーにあこがれるからだろう。人が集中する所には、あらゆる物質や、情報や、快楽や、苦痛や、善や悪が集中する。それらが混然として、巨大なエネルギー源となるのである。多くの人と接することで、自分のエネルギーを高め、それが相乗効果を生み、社会全体のポテンシャルを高める。少し前までの東京も、確かにそんな魅力のある街だった。東京という街の持つポテンシャルは、ある意味では、世界中のどの都市よりも高いように思える。しかし、最近、そのエネルギーが少し変質してきたように思えてならないのだ。

自分の周辺にいる人間たち、とりわけ仕事や趣味を通じての人間関係に大きな変化はない。逆に、以前よりも親密になっているようにも感じられる。反面、そうでない人間達との間はどうかと言つと、きわめて冷めたものになっているのに気がつく。自分のまわりに人がいるということは、本来、大きな安心感に結びつくものだ。たとえ、それが見知らぬ他人であったとしても、絶海の孤島に居るよりはマシなはずだ。しかし、人混みや満員電車が煩わしく感じられ、ときどき無人島にでも逃げ出したいと感じるのは何故だろう。

大都会には様々な人間たちがいる。その中には少なからず、「善人」とはかけはなれた人種だっている。うっかり気を許せば骨まで喰われてしまう、弱肉強食のジャングルなのだ。見知らぬ人間に対する必要以上の心理的な壁は、こつこつといった環境から生まれてくるのかもしれない。そして、それは少なからず、お互いにとってストレスとなる。譲り合いの精神などと言うが、

譲ればとことんつけこまれかねないという不安があるがゆえ、誰もが傲慢になつていくのだ。それでも、「善人」とつては、それが苦痛だ。自分が傲慢であることに耐え難いものを感じながら、それでも自分を守ろうとして傲慢であり続けるところに、ストレスのひとつの根っこが存在するのである。

最近の若者は、すぐ「群れる」といわれる。いや、若者に限らず、自分の「身内」に対する防御姿勢は、年々、次第に強まっているように思われる。仲間はずれになりたくない。この気持ちは、無意識に「壁」の内側と外側の違いを感じているからである。「壁」の外に出されてしまうことは、一切の保護を失うことを意味する。そればかりでなく、攻撃対象にさえなりうるのだ。「壁」の外では、人は「善人」ではいられない。常に傲慢になつて自己防御をせねばならず、それがまた、悪循環を生み、さらに集団から疎外される結果となる。「善人」は「壁」の内側にいたいばかりに、自分の願望や欲求を押さえ、その集団に迎合せざるを得ないのである。集団には必ず「ボス」がいる。「ボス」は集団をまとめる力である。それゆえ、普通、「ボス」は民主的な方法では選ばれない。力の強い者(といってもこれは単に物理的な力だけではなく、広い意味での政治力のことだ)が「ボス」たりうるのである。「ボス」の力で集団は成り立っているのだから、その考え方次第で、開放的にも閉鎖的にもなる。概して、力の弱いボスほど閉鎖的で防御的な集団を作るようだ。カルトなどは、その極致だろう。外界との間に高い垣根を作つて、内部を特定の価値観で埋める方法は、集団を維持するには効果的だ。外界に対して、敵対心を煽ることで、結束を固め、集団を維持していく方法は、古来から使われている。特に日本では、江戸時代の鎖国などは言つに及ばず、大戦中においても国家ぐるみで、この手法が使われた。極端になれば、外界の価値観を完全に否定し、攻撃行動に出ることもある。往々にして、それは自己破壊に至る破滅的行為である。オウム真理教、戦前の日本などはい例だろう。そして、この攻撃行動を起すきっかけは、「ボス」の一声であることが多いのだ。多くの「善良な」人間は、集団から出されたくないばかりに、「ボス」の声に踊るのである。ここまで極端ではないにしろ、人々の「群れ」志向は、だんだん強くなつていようと思えるのだ。

しかし、「これは、どこかで見た光景ではないか。かつて、自分が田舎を飛び出した頃、最も嫌だった「村社会」そのものではないか。社会のバイタリティーを阻害する最大の原因だと思ひこんでいた「村社会」が、大都会東京の、

あちらこちらに存在しているのだ。学校で、会社で、渋谷で、新宿で……。様々な「村」が街を闊歩している。いまや、大都市東京は広大で危険きわまりないジャングルと化し、そのあちらこちらに、小規模な村が出来て、人々が暮らしている。「村社会」からの脱却を志し、多くの人間と接することでバイタリティーを得ようと東京を目指した人の多くが、この新しい「村」に吸収されてしまっているというのも皮肉な話だ。

遷都論が叫ばれる今日、いまだに東京を目指して人は集まってくる。それだけ、東京は魅力的な街なのである。いや、今やむしろ、日本中の希望や夢や欲望を吸いつくすブラックホールと言ったほうがいいかもしれない。あまりに多くの夢や希望を吸い込んだがために、それ自身の重みで崩壊してしまっただ。しかし、崩壊した今もなお、強大な力で、あらゆるものを吸い込み続けている。このブラックホール東京を封じるといふ点で遷都論は魅力的だ。しかし、新たなブラックホールを生み出すような愚だけは避けねばなるまい。遷都したとしてもなお、東京は、日本の中心都市としての地位を守り続けるだろうし、その吸引力は多少弱まるものの、なくなりはずしい。もし、新たなブラックホールが生まれてしまえば、そこには東京からではなく、他の地域から、さらに大量の人や情報や、あらゆるものが流れ込むことになる。これでは、また新たな集中を作ってしまうことになるのだ。このような愚だけは決して犯してはならない。地方の活性化こそが、東京集中を緩和し、逆に、東京をまた真の意味で活気あふれる街にするだろう。すべての情報を独占し、発信している東京。しかし、地方発の情報が東京に変化を与えることだって、あつていいはずだ。

東京に出てきた地方出身者は、みんな「東京人」になろうとする。そうでないのは、大阪が日本の首都だと勘違いしている大阪人くらいだろう。彼らのように、粋がつて大阪弁を振りまけとまでは言わないが、自分の郷里の良いところくらいは主張していいのではないか。日本語バイリンガルを自称する私なんかも、大阪人相手には大阪弁、関東人相手には東京弁（標準語）というと関西人が怒るのである）と使い分ける。東京では「東京人風」、大阪では「大阪人風」と都合良く調子を合わせているが、やはり、多少、自分の田舎に対しては、「コンプレックスを抱いている。地方人が都会に抱くコンプレックスには様々な理由がある。言葉の問題、そして、経済的貧困。遷都を言う前に、このコンプレックスの原因を取り除くだけの投資を地方に対して

行い、地方人が「東京人」の蓑をかぶらずに、東京で活動できるようにすることが重要だろう。日本の中心が東京であることは変わらなくても、東京に住まずとも、東京のエネルギーを享受できることが、過度の集中をくい止める有効な方法ではないだろうか。

私は東京が好きだ。そこには、底知れぬエネルギーがある。しかし、また、そのエネルギーを享受するために、多くのエネルギーを使わなければならぬのも現実だ。自分の中の、エネルギーが底をついた時、人は、敗北感を味わいながら表舞台を去っていく。人であられる東京、しかし、その中で感じる孤独感こそが、今の東京の現実を物語っているのである。

PART3: パンドラの箱

「現代人は心を病んでいる。」

ノイローゼ、自殺、そのような事件の解説の枕詞の常套句であるこの言葉ほど、いいかげんで曖昧なものはないと思う。それは、凄惨な事件の本質を覆い隠してしまうのに、まことに好都合な言葉だ。

昔から、「自分が気違いだと思ってる気違いはいない。」(気違い＝精神異常者)でもすべきところなのだろうが、私の意図する意味、語感はこちらのほうが近いので敢えて使う。(などと云うが、誰も自分は正常であるはずだし、そうありたいとする強い願望があるものだ。そういう聞き手に、「心を病んだ結果の事件」と言えば、誰も自分に照らしては考えまい。「ああ、可哀想に。自分はまだ幸せだな。」などと、自分を高所において納得してしまうだろう。たとえば、その事件の背景に、多少身につまされる部分があったとしても。

自分の「心」を知ることは、簡単なようで難しい。自分の物であって、しかし、時折、自分自身と葛藤する「心」。スキルとハイドではないが、誰もが、慈悲深く建設的な心と攻撃的、破壊的な心の両方を持ち合わせている。いや、この例えは正確ではないかもしれない。たとえば、攻撃的で建設的な心とか、慈悲深く、破壊的な心なんてのもあるだろう。言うならば、あらゆる選択

肢について、それを是とする「心」が存在するというほうが正しいのかもしれない。

誰もが、と言ったが、私は他人の心を覗いたことがない。だから、これは自分が「気違い」でないと仮定して、自分のケースを一般化しているにすぎないのである。それでも、そうする以外に論ずる方法がないから、とりあえずお許し願おう。もちろん、私は精神科医でも心理学者でもないから、この考察はまったくの「素人的考察」であるとお断りしておく。

話を戻すが、この無数の選択肢のひとつひとつを決めている基準は何だろう。毎回、同じ選択肢が選ばれるものもあれば、毎回、変わるものもある。要素は色々あるだろう。すべての生物に共通な、生存願望や繁殖願望といったものは非常にわかりやすく論理的だ。自分の種が永続的繁栄を続けるための選択、次に自分が生き残るための選択。これらはすべての生命に共通のグローバルな判断基準であり、すべての生命が生まれながらに持つ、基本的なプログラムである。人間以外の大半の生物は、この基本プログラムに忠実に生きている。基本プログラムに優先する判断基準を持ち合わせていないためだろう。そして、何十億年もの間、この基本プログラムは非常にうまく作動してきた。基本プログラムに優先する判断基準を行使することを許された、ある種族が登場するまでは。

神と呼ぶべき者が真に存在するとすれば、この基本プログラムの開発者のことだろう。そして、「神」が自らに似せて造ったという「人間」は、理性の名の下に、基本プログラムに優先した判断を行うことを許されたのである。しかし、「この自由と引き換えに人間は多くの苦難を背負い込むことになる。つまり、自らの運命の多くの部分を自分で決定できるかわりに、その責任をすべて自分で負わねばならぬ」という点においてである。あらかじめ決められた道筋に沿ってではなく、自分で考えて決め、結果が悪ければ考え直さねばならないのだ。そして、今やその判断は人類自らのみならず、地球上のあらゆる生命に影響を及ぼすことは間違いない。これは、裏返して言えば、地球の全生命に対して責任を負えということにほかならない。「神」は名実ともに自分の代理として人間を指名したのだ。これがいわゆる「パンドラの箱」の真実だと私は思う。

ともあれ、開けざるを得ない。「パンドラの箱」を慈悲深い「神」から押しつけられた人類は、悩みという災厄をまず受け取ったのである。自分たちの前途に苦難はあるが限界はないという、「希望」という名のニンジンをごらさげられて、この数千年というもの、人間は悩み続けてきたのである。もちろん、何も初期条件を与えずに放任するほど神も横着ではなかったのだから。自らの「教え」という形で、とりあえず無難な基準を与えて行くことは忘れなかった。但し、これがまた曲者で、異なるグループに、複数の微妙に異なる基準を与え、いずれ必ず、それを信奉するものたちの間で葛藤が生じるように仕組んであったのだらうと、私は推測する。結果として、とりあえず無難だった基準の一部は普遍性を失い、新しい基準を作る必要が生まれるように。神の教えは、最後にはすべて書き換えられねばならないのだ。人類によって。

というように哲学的？に考えれば、悩みも少しは軽くなろう。戦前生まれを親に持つ私の世代くらいまでは、幼い頃に親の価値観で厳しく躾けられることが普通だったように思う。また、その価値観はおおむね普遍的で、私と隣家の悪童の間でさほど差異はなかった。つまり、隣の親父が、私が隣家で悪事を働いたカドで、私に一発ゲンコをくれても、私の親は感謝こそすれ、暴力を抗議する筋合いなどなかったのである。そこには、明らかに「神」の倫理が存在していた。もちろん、時代時代の権力者の都合の良いように部分的にゆがめられたりはしていたが、誰が努力したでもなく普遍的に存在したという点で、これは「神」の基準であった。少なくとも、日本全国どこをとっても、隣の親父の暴力行為を非難する輩は少数派どころか、それこそ「気違い」と呼ばれたらう。

戦後、様々な価値観が日本に流入し、既存の価値観と葛藤を生じた。結果、いくつかの価値観が、旧来のものと交替した。しかし、古い価値観を駆逐しただけで、自分がその替わりになりえなかったものも多い。とりわけ欧米産の民主主義的価値観は、旧来の日本の封建的価値観を力づくで駆逐しはしたものの、いまだに、本質的に根付いていないように思える。そもそも、それらの価値観の起点となる「神の教え」の違いによる葛藤なのだろうか。今の日本は、「普遍的価値観」不在の国のように見える。そもそも、普遍的な価値観などいらぬ、という人もいるかもしれない。戦前の暗黒時代の幻影におびえる人もいる。一方で、戦前の普遍的価値観の再来を求める人も

いる。しかし、声高に叫ぶものの、どちらもいまひとつ決め手に欠け、一般大衆の支持は得られそうにない。我々の世代の先輩たる「全共闘」世代の「挫折」以降、普遍的価値観を求める動きは激減し、かわりに多様性という名の「あいまいさ」が闊歩している。表向きの葛藤はなりをひそめ、見かけの上の寛容さが日本を支配しているようだ。

しかし、考えてみてほしい。多様性を認める、つまり、自分の価値観と違うものを許容するということは、相手の価値観に対する評価をあいまいにすることではないと思う。今の自分の価値観に照らして相手を評価した上で、相れない部分について、自分が譲れる範囲で歩み寄るのである。言い方を変えれば、お互いの価値観が、影響しあい、結果として、一部、共通の価値観ないしはルールが生じることになる。そうでなければ、社会自体が成り立たない。カオスとしかいいようのない状況が生じるに違いない。

このような多様性の容認には必ず葛藤が伴うものだ。そういう意味で、現代人の悩みの多さは必然とも言える。まさに、「神」が与え賜うた試練なのだ。

我々日本人、とりわけ一般市民は自らルールを生み出すことに不慣れだと思う。規制緩和というが、一昔前までは喧嘩の仲裁役としての規制を公権力に求めていたのではないか。規制緩和そのものを否定するつもりはない。一方的で硬直した規制よりも、自由な競争から生まれてくるはずのルールのほうがより発展的だからだ。しかし、規制なしでルールを生み出す力が、はたしてあるのだろうか。建設業界などの談合はいい例だろう。公権力による規制がないと、自然発生的に談合組織のような、規制を肩代わりする組織ができあがってしまいはしないかという危惧が、常につきまとう。こうなってしまうえば、厳密に法に基づくことを(少なくとも表向きは)強制される公権力とは異なり、リンチ的制裁を拘束力にした、よりタチの悪い規制が闊歩する危険がある。政府は規制を緩和すると同時に、間接的にこのような動きを排除するしくみを考えるべきだろう。

新しいものを産み出す際に葛藤はつきものだと思う。葛藤が、悩みがあるということとは、その社会や人がまだ発展の可能性を失っていないことの証明でもあるのだ。行き詰まるということは、言葉を変えて言えば、その社会や人が、これまでの自分のありかたを再考する必要がある、ということに

ほかならない。そう考えて、自分の歩んで来た道をもう一度振り返って見れば、必ず脱出口は見えてくるはずだ。

冒頭の話に戻るが、私は現代人は決して「心を病んで」などいえないと思う。むしろ病んでいるのは日本の社会である。人間のいたって正常な葛藤を「病氣」と決めつける社会があるのだ。本来、「死」を考えるような悩みなどないはずだ。死ぬ必要のない犠牲者を社会がなんらかのかたちで、追いつめて殺しているのだ、と私は思う。そして、その社会を作り上げているのは我々なのだ。出口のない不況といわれる現在の日本。社会全体が葛藤することを求められ、変わることを求められている時、その責任を一個人に押しつけてはならないのだ。「心を病んで」という言葉は、その裏にある本質を覆い隠すのに都合がいい。「悩んだあげく」という言葉もそうだ。そもそも、どうしたらその人間が死なずにすんだのか、という議論はどこからも聞こえてこない。

自殺は究極の逃避である。これによって逃れられないものはない。葛藤を放棄するということは、即ち(現実逃避などの精神的なものを含めて)自殺に結びつく。日本の社会は、今、葛藤のさなかにある。社会的な課題を個人レベルに矮小化したり、あいまいにしたまま放置することは、社会としての逃避である。そして、もし、日本がこの葛藤から逃げたならば、それは即ち、日本という国の自殺にほかならないのだ。

パンドラの箱から最後に出てきたのは、「神の代理」の肩書きの名刺だった。そして、「神」は、やがて「代理」の文字をはずすことを望んでいる。われわれ人類は、自ら「神」たらんがために葛藤するのだ。